

## ラスベガスでワールド・ティー・エキスポが開催

蟬本 睦

### 〈全世界のお茶業界が集まる〉

ワールド・ティー・エキスポ（The World Tea Expo）が6月12日～15日までの4日間、ラスベガス・コンベンションセンターにて開催されました。お茶に特化した展示会・カンファレンスとしては、全米最大だと筆者は思います。12日から始まったカンファレンスでは、お茶のビジネスを行う受講者に対して、朝から夕方までびっしりとレクチャーが組まれており、13日の午後3時から併設の展示会が開催されました。以下にその様子についてレポートさせていただきます。

展示会には、日本勢としては、静岡、鹿児島、中部（三重、愛知）も参加。他にも、セイロン（スリランカ）、インドの紅茶勢、中国、台湾などの烏龍茶勢の参加が目立ちました。また例年よりも中国、韓国のアジア勢の出展が増えたように思います。また、紅茶文化がもっとも進んでいるともいえるロシアを含めた欧州勢に加え、独特のお茶を出している中南米やアフリカなども交えて、まさに世界のお茶業者が一堂に会している感じがしました。

### 〈年々高まるお茶の需要〉

米国茶協会（Tea Association of USA : <http://www.teausa.com>）によれば、米国は先進西側諸国で唯一、お茶のマーケットが成長しています。伝統的なティーバッグ入りや茶葉の市場は横ばいながら、ペットボトルや瓶詰めされた形態のお茶と、ハイエンドの高級茶のまさに両極の需要が堅調に伸びているとのこと。また、同協会によれば、ミレニアル世代と呼ばれる、米国の若い世代の87%がお茶を飲み、全国民平均をはるかに上回っています。伝統的には、南部、北東部などの保守的な地域ではお茶が好まれています。健康志向の高まりでしょうか、若者世代にも広くお茶文化が広がっているようです。

### 〈日本政府も後押し、有機と抹茶〉

ワールド・ティー・エキスポには、日本政府としても力を入れ始めました。ジェットロも昨年よりブースを構え、日本のお茶の広報を行うとともに、展示会場内で、複数コマのセミナーを行っています。日本政府としても、お茶の輸出に今後力を入れていくとのこと、頼もしい限りです。

米国における日本茶は、米国では珍しいお米をローストして添加してある玄米茶、そして煎茶、次に高級茶としての玉露とトレンドが移って来ていますが、現在では抹茶がブームとなっています。抹茶とは、本来は茶葉に覆いを被せて、日光を遮蔽して、茶葉を揉まずに乾燥した茶葉（碾茶）を茶臼で挽いて微粉状に製造したものを指し、かなりの手間がかかることから、高い値段がついています。

一方で、菓子やアイスなどの加工品で抹茶という名前を使いながら、単に安価な茶を粉末上にしたものを加えたものもあるようなので、そのあたりの整理とブランディングが課題です。また、米国市場では、残留農薬への懸念から有機農法、いわゆるオーガニックのお茶を好みますが、日本では虫害も多いことから、「まだまだ有機への理解と対応が遅れている」というのが、米国側からみた課題とジェットロの担当者も話していました。

### 〈お茶にまつわる商品〉

日本勢としては、お茶の他にも多くの参加がありました。お茶をパックする機械の不双産業（静岡）や、お茶のフィルターの大紀商事（大阪）、また象印なども出展していました。弊社としても、全米ほか海外を含めた販路開拓に欠かせない展示会となっています。

以上、今号はワールド・ティー・エキスポをご紹介しましたが、広島県企業のビジネスの参考になれば幸いです。

